

飼料作物用播種機を用いた飼料イネの乾田直播栽培

鈴木淑恵・小畑 寿・藤井真理
(宮崎県畜産試験場)Yoshie Suzuki, Hisashi Obata and Mari Fujii :
Sowing Method of Fodder Rice Using Forage Crop Seeding Machine in Dried Paddy Field

飼料イネは移植栽培が主流であるが、経済性を高めるためには直播栽培への転換が不可欠である。なかでも乾田直播栽培は省力的で有望であるが、収量が不安定であることから普及の拡大には至っていない。

本試験では、低コスト安定多収乾田直播栽培技術の確立を目指し、畜産農家が所有する飼料作物用播種機を使用した簡易播種について検討を行った。

1. 材料および方法

25馬力の小型乗用トラクタで、飼料作物用の2条用施肥播種機を牽引し、当試験場内の水田10aを使って2002年5月27日に簡易播種を行った。供試した品種は「モーれつ」、「スプライス」、「クサノホシ」の3品種で、播種方法は畝幅45cmの条播で実施した。施肥は、被覆尿素入り緩効性肥料を使用し、N量9 kg/10aを全面に散布した。

入水後は移植栽培と同様の栽培管理を実施した。

2. 結果および考察

1) 作業経過

水田の準備として播種1~2か月前に堆肥3 t/10aを投入し、耕起しながら均平作業を行った。その後、入水時の漏水対策として代かきを行い、攪拌した土が落ちてから落水し乾田に戻した。

播種当日、緩効性肥料を全面に散布し、耕起したのち播種作業へ移った(写真1)。種子を播種機の肥料用BOXに入れ、落下口を施肥量目盛りにより調節し播種量を調整した。播種と同時に軽く覆土し、播種が終わった後で鎮圧を実施した。播種直後に1回目の除草剤を散布し全作業を終了した。

播種後8日目に苗立ちを確認し(写真2)、入水を開始した。始めは浅めの水深を保ち、分けつ開始時から移植栽培同様の水管理へ移行した。入水後に初期および中期の除草剤散布を行った。

除草剤以外の薬剤は使用せず順調に生育し、2002年9月30日に黄熟期で刈り取りを行った。



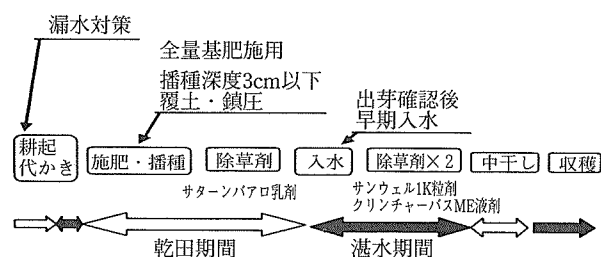
写真1 機械播種作業



写真2 苗立ち状況

2) 播種作業のポイント(第1図)

①播種前の代かきとあぜ波を周囲に埋め込むことで漏水を最小限に抑える。②緩効性肥料を全量基肥として投入し、追肥を省略する。③苗立ち率を向上させるため、播種深度は3 cm以上にならないよう播種機を調節する。④籾を催芽処理することで苗立ちを早め、早期入水により乾田期の雑草発生を抑える。



第1図 作業上のポイント

3) 収量調査(第1表)

坪刈り調査を行った結果、畝幅が45cmと広がったこともあり収量はやや少なく、乾物収量は1 t/10a前後に止まった。また、生育は良好であったが全体的にやや小さく、茎数も少なかったことから基肥の全面散布により肥料利用率が低かったと推察された。

以上の結果から、飼料作物用播種機を利用した播種は簡易かつ短時間で済み、省力化が図られる。播種機使用による障害はみられず生育は良好であったが、収量性を向上させるためには適性播種量や施肥方法についてさらに検討する必要があると思われる。

第1表 収量調査結果

品 種	草丈 (cm)	稈長 (cm)	稈径 (mm)	茎数 (本/m ²)	生草収量 (t/10a)	乾物率 (%)	乾物収量 (t/10a)
モーれつ	116	84	6.5	188	2.5	40.7	1.03
スプライス	117	99	6.2	147	2.2	43.4	0.95
クサノホシ	102	74	6.1	143	2.0	45.5	0.92